

説教 『沈黙、見えない言葉』山本 護牧師
聖書 ヨブ記4:6~9/マタイによる福音書8:14~17

ペトロは弟アンデレと共に、網を捨ててイエスの最初の弟子となった(マタイ4:20)。「網を捨てる」とは漁師廃業の意味で、零細ながら「網元」である生家からの離脱も暗に語っている。イエスの招きに答えて出家したものの、実は養うべき妻と姑がいて、しかも姑は病に伏せていた(8:14)。家に戻ることは面目丸つぶれだが、ペトロは率直に事情を話したのだろう。イエスはただちに彼の家を訪れた。

イエスははずけはずけ部屋に入ると、「しゅうとめが熱を出して寝込んでいるのを御覧になり(8:14)、その手に触れると熱は去った(8:15)」。病床への突然の来訪、みつともない部屋を見られたくないが、イエスは有無を言わず、それらを「御覧になった」。ペトロも、嫁も、姑も、体裁を繕っている猶予はない。私にも経験あるが、病人が伏せている部屋は陰気で暗く、気が滅入る。そこに終始無言なイエスの断固たる「まなざし」が注がれ、暗さの源に「触れる」。するとどうだろう。「熱は去り、しゅうとめは起き上がってイエスをもてなした(8:15)」。病の闇は一転して、明るい希望に変わった。

その日は安息日(8:16)。癒し行為は律法破りの犯罪だが、イエスは当然のように「闇に光が灯る」ことを優先した。安息日が明ける「夕方になると、人々は悪霊に取りつかれた者を大勢連れて来た(8:16)」。するとイエスは「言葉で悪霊を追い出し、病人を皆いやされた(8:16)」。姑の時は沈黙のまま癒したのに、大勢の悪霊憑きには言葉で癒した。大勢の悪霊に、何と言って追い出したのか。神の権威で「出て行け」と命じたのだろうか。そういう場面もある(8:32)。だがここでの「言葉(logos)」は、悪霊に勝利する神の「見える言葉」とは違う、「見えない言葉」ではないか。

「それは、預言者イザヤを通して言われていたことが実現するためであった。〔彼はわたしたちの患いを負い、わたしたちの病を担った〕(8:17)」。すなわち、「悪霊を追い出し、病人を皆いやされた」言葉とは、これから負うことになる十字架という「御言葉」のこと。つまり「十字架の言葉(logos)は、滅んでいく者にとっては愚かなものだが、わたしたち救われる者には神の力(1コリント1:18)」。

世のおびたしい人々を皆(マタイ8:16)、病(あるいは死)の拘束から解き放つために、神の御子は十字架において「わたしたちの患いを負い、わたしたちの病を担われた」。沈黙のまま触れて癒すことも、言葉で悪霊を追い出すことも、十字架という犠牲の愛に根拠がある。だが癒される当事者たちは、感謝こそすれ、十字架のことなど到底分からない。沈黙した断固たるイエスのふるまいが、それを象徴している。

エリファズは、友ヨブの苦しみの理由をもっともらしく述べる。「考えてみなさい。罪のない人が滅ぼされ、正しい人が断たれたことがあるかどうか。～災いを耕し、労苦を蒔く者が、災いと労苦を収穫することになっている(ヨブ4:7~8)」。敬虔ぶって「わたしなら、神に訴え、神にわたしの問題を任せるだろう(5:8)」と偉そうだ。苦しむ当事者ではない人間が、余裕ある正論を吐く。エリファズの因果応報的な理屈は、一般の宗教基準ではあろう。だがイエスはまったく違う。苦しむ者を放っておかず、信仰や理解があろうがなかろうが、御自分を犠牲にしてまで病人を皆、癒してしまう(マタイ8:16)。



【おまけのひとこと】

私が目覚めていても眠っていても 星辰の運行に変化はない 信仰の有無に係わらず 十字架が人を癒す 十字架は私と共に在り 折々に悲しみを負って共に響いている 星辰をも動かしながら